

ルカによる福音書 15 章における  
三つの譬えについて  
—— Luther 訳聖書と現代ドイツ語訳聖書に基いて——  
(4)

角 谷 善 朗

IX 引用句としての「いなくなった羊」

ルカ伝 15 章 6 節に由来する「いなくなった羊」の用例については、Friedrich Schiller (1759 – 1805) の *die Räuber* (1782) の 1 例と Charles Dickens (1812 – 70) の *David Copperfield* (1849 – 50) の 1 例を、先に報告<sup>1)</sup>してあるが、その後 3 例の a lost (stray) sheep の用例を収集することが叶ったので、本稿で取り上げる次第である。

3 例のうち 2 例は、Emily Brontë (1818 – 48) の *Wuthering Heights* (1847) で、残る 1 例は Mark Twain (1835 – 1910) の *The Adventures of Huckleberry Finn* (1885) で得られた。

1 Emily Brontë の *Wuthering Heights*<sup>2)</sup>

Yorkshire の丘に建つ *Wuthering Heights* (嵐が丘) の住人と *Thrushcross Grange* (スラッシュクロス屋敷) の住人との間で展開して行く愛憎が主題である。

嵐が丘の当主 Mr. Earnshaw は、哀れな父<sup>て</sup>なし子を街から連れ帰って、Heathcliff と名付けて養子にして可愛がる。二人の実子のうち、姉の Catherine は手に負えない御転婆娘 (a wild, wicked Slip) であるが、彼ととても仲良くなったのに、弟の Hindley の方は、彼を父の愛情と自分の特権を奪った者として (as a usurper his parent's affection an his priviledgs) 虐めたのであった。

父が死ぬと Hindley は、彼を家族から召使いに格下げして、野良仕事をさせる。

数年後に Catherine は、スラッシュクロス屋敷の跡取りの気立ての優しい、金持ちの Edgar Linton に思いを寄せる様になる。彼は Heathcliff とは幼い頃から、犬猿の仲である。

Catherine は家政婦の Ellen (Nelli) Dean に、Heathcliff と結婚したら、私達二人は乞食みたいに貧乏になる (we should be beggars) のは目に見えているから、彼を愛してはいるけれど、彼は自分には相応しくないと告白する。それを耳にした Heathcliff は激昂して嵐が丘から出奔して仕舞う。それが元で Catherine は一時期、精神錯乱 (delirium) に陥る。

その後 Catherine は Linton と結婚して三年を経た頃、Heathcliff が戻ってくる。財力を蓄え、理知的で、昔の様な退廃的な印象は少しもなく、紳士然としているのに驚かされる。

Catherine は再会を喜び、Linton は不快の念を抑えて、客として対応する。

Heathcliff は金にものを言わせて、嵐が丘に入り込んで、妻の死後酒浸りの Hindley を毎晩賭博に引き込んで、土地を抵当に借金させた上で賭けて飲むばかり (Hindley does nothing but play and drink) にして仕舞う。

その上に Hindley の幼い息子 Hareton も、礼儀を弁えない上に読み書きの出来ない子供に育つ様にする。この様な予想もしなかった変わり様をまのあたりして、Dean はこの状況を、「いわば迷える羊である Hindley が神さまに見はなされて悪の道を歩んでいる嵐が丘、そこへ Heathcliff という悪い獣がやってきて、そばをうろつき、とびかかって食い殺すチャンスをねらっているのだと感じられてならなかったからでございます<sup>3)</sup>」と譬えている。

I felt that God had forsaken the stray sheep there to its own wicked wanderings, and an evil beast prowled between it and the fold, waiting his time to spring and destoe.

Linton の妹の Isabella は、客として認められているが、兄とは性格が異なる Heathcliff に引き付けられる。Catherine は彼女に、彼は財産目当てに結婚する

のだから、Linton 家の者を愛せる訳がないので思い直す様に説得するが、彼は尊敬に値する人物だとして聞き入れない。

Heathcliff は Catherine に、「君から非道い仕打ちを受けたと考えている。俺がその復讐をせずに温和しく我慢すると思うなら大間違いだ。もう直ぐ分らせてやる (I want you to be aware that I *know* you have treated me infernally! infernally! and if you fancy I'll suffer unrevenged, I'll convince you of the contray, in a very little while)」と言い放つのである。

Heathcliff は Linton と Catherine の心を動揺させた上に、愛してもいない Isabella に迫って、駆落ちして仕舞い、Catherine は精神に異常<sup>きた</sup>を来す。

程なく Isabella から、嵐が丘に戻って来たが、Heathcliff は人間だろうか (Is Mr. Heathcliff a man?), 私は不幸だと Dean に知らせてくる。

Heathcliff は Linton が不在の時に、窶れた Catherine の元へ忍んで行き、二人は激昂して思いのたけを言い合う。Heathcliff は、君が自分自身の意志で僕達二人を引き離れたんだと責め立てて、Catherine は許しを求めて、その晩に一子 Catherine を出産して死んで行く。Heathcliff は激情に駆られた挙げ句に、「俺が殺したと君は言った。それなら亡霊になって、俺のところに出て来るがいい。俺が活着している限り、安らかに眠ることのない様に! (You said I killd you - haunt me, then! Catherine Earnshaw, may you not rest as long as I am living!)」と叫ぶ。

妹の死後 Hindley もあとを追う。土地は全て抵当に入っていて、Heathcliff が抵当債権者 (mortgagee) である。彼は Hareton を給金なしの召使いの身分に落として、獣の様に育てることに悪意の限りを傾ける。

Isabella は嵐が丘で一晩過ごすくらいなら、地獄に住めと命令される方がまだと、実家に逃げ帰って、その後 London に遁れる。

Isabella は十二歳になる Linton を遺して死んで行く。彼は伯父 Linton に託されるが、Heathcliff の元に引き渡されることを余儀なくされる。彼は病弱で気難しく、自分の体ばかり庇っている意気地なしの子供 (a faint-hearted creature) である。

Heathcliff は息子がやつらの土地屋敷の持ち主 (prospective owner) に堂々と納まるのを見て、勝利を味わいたいと悦に入るのであった。

Catherine は父親に Cathy の愛称で呼ばれて、器量よし (a sweet little girl) に育って、熱心に学ぶ利発な生徒として、父の期待に応えるが、御転婆娘 (the naughty thing) でもあって、頻りに敷地の外へ出たがる様になって行く。併し乍らそれは固く禁じられているのであった。

ところが Linton が家を空けた折に、Cathy は小馬に乗って出掛けて、日没が迫る頃にも一向に戻って来ない。Dean が必死に捜し回ると、迷える小羊 (my stray lamb) は何と嵐が丘にいたのだった<sup>4)</sup>。中に入ると、迷える小羊である、わたしのお嬢さんは、暖炉のそばで、昔母親の Catherine が子供の頃使っていた小さな揺り椅子に座って、椅子を揺すっていた。

I entered, and beheld my stray lamb seated on the hearth, rocking herself in a little chair that had been her mother's when a child.

そして Heraton に親しげに話し掛けていたのだったが、このことは父親には内緒にしておく約束させる。

その後も外へ出掛けた Cathy は、Heathcliff にも出会って、とても親切 (quite cordial) だったと父親に話す。父は Cathy に、Heathcliff は憎む相手を破滅させて喜ぶ、とても恐ろしい人 (a most diabolical man) だと懇々と論すが、納得しないで、Heathcliff の息子の Linton と秘かに文通するが、露見して仕舞う。

父は Cathy と甥の Linton の執拗な懇願に負けて、二人が会うことを認めるが、これは息子の体調が衰えているのを知った Heathcliff が、冷酷で欲深い計画 (his avaricious and unfeeling plans) が挫折するのを恐れて謀ったことなのである。

Heathcliff は Cathy を嵐が丘に暴力に訴え、閉じ込めて、翌日 Linton と結婚させることにして、帰して欲しいと願っても全く耳を貸さない。あんたの父親が悲しむと思うと、嬉しくて嬉しくて眠れないんだ (Miss Linton, I shall enjoy myself remarkably in thinking your father will be miserable) とまで言い放つ。

Cathy は Linton に助けられて、体調が激変した父の下<sup>もと</sup>に戻れて死に目に会えることが叶う。

Linton は伯父 Linton が死ねば、屋敷を継いで主人になる (master of Gange after

him) と喜ぶが、Heathcliff の狙いは、家屋敷だけでなく財産の全て (the personal property, as well as the estate) を自分のものにするのである。

その上に埋葬される時は Catherine と俺の棺の横板を外して、二人が一つになる様に細工することを指示しておくのである。

Cathy は嵐が丘に連れ戻される。そして暫くして Linton が具合が悪いことに気付くが、父親の Heathcliff は一切取り合わず、医者にも見せないで、Linton は他界して仕舞う。Heathcliff は Linton と Cathy の動産は全て自分に遺す旨の遺言状を認めさせておいて、二人の所有するものを悉く手に入れたのである。Cathy は嵐が丘に住まわせて、スラッシュクロスは貸しに出す。

Cathy は Heathcliff と Hareton の二人を軽蔑していて、口も利きたくない (I despise you, and will have nothing to say to any of you!) という態度で接する。かつて Linton と二人で、Hareton の無知蒙昧を笑い物にしたが、改めて無学に加えて向上心まで嘲笑する。

併し乍ら、Hareton と Cathy の間に愛が芽生えて、かつての敵は味方同志になって (Hareton and I are friends now), Heathcliff に反抗するに至るのである。

Heathcliff は二人の目が Catherine の目に、とてもよく似ているのと、Hareton が Catherine に余りにもそっくりなのに驚かされて、十八年も掛けて、あれ程猛烈に励んだ末に、こんな馬鹿げた終局とは (an absurd termination to my violent exertions?) やつらの破滅を喜ぶだけの元気をなくしたんだ、訳もなく破滅する気にはなれない (I have lost the faculty of enjoying their destruction, and I am too idle to destroy for nothing) と告白して、四日後の朝彼に取り憑いていた Catherine への熱烈な想いも、復讐への執念も燃え尽くして仕舞ったかの様に死亡している。

Hareton はこれ迄の無知と零落の雲 (the clouds of ignorance and degradation) を素早く払いのけると、正直で心の温かい、賢い天性 (honest, warm and intelligent nature) ——これは Heathcliff も気付いていたところであったが——が現われるのであった。そして Cathy と Hareton の両名は、一人は愛し、尊敬したいと願ひ、もう一人は愛し、尊敬されたいと願ひ、二人の心は共に同じところに向かっていたのである (both their minds tending to the same point – one loving and desiring to esteem, and the other loving and desiring to be esteemed)。

互いに好意を寄せ合って、共に向上を図っている二人には、明るく、和やかな今後の約束されていることを疑う余地は聊かもないと思われる。

さて「いなくなった羊」の用例は、10章で the stray sheep とそれと対立する an evil beast が、18章で my stray lamb が得られたのである。

それぞれの語句は、三宅幾三郎訳「嵐ヶ丘<sup>5)</sup>」においては、「迷へる羊ヒンドレ」, 「一匹の悪い獣」そして「私の迷へる羊キャシイ嬢」と訳出され、阿部知二訳「嵐が丘<sup>6)</sup>」では、「迷い羊」, 「一匹の恐しい獣」そして「わたしの迷羊」, 大和資雄訳<sup>7)</sup>では、「迷える羊」, 「悪い獣」, そして「私の迷児の仔羊」, 永川玲二訳<sup>8)</sup>では、「迷える羊」, 「おそろしい野獣」そして「わたしのまよえる小羊」, 河野一郎訳<sup>9)</sup>では、「迷える羊」, 「野獣」そして「迷える小羊」, 小野寺健訳<sup>10)</sup>では、「迷える羊」, 「この悪魔となった獣」そして「あたくしの迷える羊」と訳出されているのである。

英文の the stray sheep, an evil beast そして my stray lamb は、特定の登場人物と結び付けられるのは明らかであって、それは註解書においても指摘されているところでもある。

最新の河島弘美訳<sup>11)</sup>に至って、それを活かして、「いわば迷える羊である」には Hindley, 「悪い獣」には Heathcliff, そして「迷える小羊」にはわたしのお嬢さんを添えて訳出しているのである。

Hindley と Heathcliff の譬え方は、当を得ていて適切である。それに対して Cathy の場合は、年齢を考慮に入れて sheep に替えて lamb が用いられている。「神のもとをはなる罪人<sup>12)</sup>」Hindley に比して、Cathy は「罪といふことには関係ない<sup>13)</sup>」のであるが、世間知らずで、父親の心配をよそに遠出して、これから我が身に降り掛かる災難など全く予想も出来ない幼気な少女の譬えとして、lamb もまた正に相応しいと思われるのである。

## 2 Mark Twain の The Adventures of Huckleberry Finn<sup>14)</sup>

The Adventures of Huckleberry Finn は 1885 年に、The Adventures of Tom Sawyer (1875) に次いで刊行された作品であって、旧作は冒険好きの Tom は仲間の Huck と、洞窟に隠されていた 1 万 200 ドルもの大金を見付け出して、それを

披露するところで締めくくられている。

それを承けた新作の主人公は Huck であって、Huck は Deuglas 未亡人に息子として引き取られて、まともな暮らしをさせてもらうことになる (The Widow Deuglas she took me for her son, and allowed she would sivilize<sup>15</sup>) (= civilize) me;)。といっても、その行儀のいい生活に全く馴染めず (but it was rough (= hard) living (= to live) in the house all the time), 逃げ出して以前着ていた襤褸に着替えて、また砂糖の大樽の中で寝る様になるが、Tom の諭しもあって、未亡人の下<sup>もと</sup>に戻って行く。すると「未亡人はわんわん泣いて、ほくのこをかあいそうな羊だとか、ほかにもいろんな名前呼んだけど、べつにけなすつもりでいってるわけじゃないみたいだった<sup>16</sup>」。

The widow she cried over me, and called me a poor lost lamb, and she called me a lot of other names, too but she never meant no harm by it.

それから暫くして、大嫌いだっ学校も苦じゃなくなって、Deuglas 未亡人の遣り方にも慣れて来た頃、零落れた父が戻って来る。父はとんでないごろつき (a hard lot (= a vicious or disreputable person)) で、息子が読み書きが出来る様になって、自分より偉くなった様な気になって、付け上がっていると思込んで、それが気に入らない。息子の金を管理している Judge Thatcher (サッチャー判事) や Deuglas 未亡人から、酒手を無心して、Huck を素面の時に捕まえると、いつもこっぴどく殴り付けるのであった (He used to always whale me (= always to beat me) when he was sober and could get his hands on me;)。

そして或る父親に捕まえられて、丸太小屋に監禁されるが、直ぐにそこでの生活に慣れて来て、だんだん好きになって来た。尤も父親に鞭でぶたれるのは嫌だったけれども、Deuglas 未亡人のところには戻りたくなかった。

ところが、そのうち父親の折檻の程度が物凄くなって、とうとう我慢出来なくなってきた (but by and by pap got too handy with his hick'ry (= hickory) and I couldn't stand it. I was all over welts (= からだ中, welts (もとの痕))。

それでなんとかして逃げ出そうと決心した。父親にも Deuglas 未亡人にも追

い掛けられずに済む様に思案を巡らせた (I got to thinking that if I could fix up (= manage) some way to keep pap and the widow from trying to follow me, :) ) のであった。

そこで泥棒に殺されて仕舞った様に見せ掛ける仕掛けをして、カヌー (canoe) で逃れる。先ず離れ島を目指す、そこで Deuglas 未亡人の姉のミス・ワトソン (Miss Watson) のところで使われてた黒人奴隷のジム (nigger named Jim) に会う。ジムは大金で売られそうになっているので、逃げ出して来たのだった。

そこで二人は、自由で安全な世界を求めて、ミシシッピー川を下って行くことになる。Jim は流れて来た家の中に射殺死体を発見するが、Huck には見ない方が良いと言ってくれる。

その後筏 (raft) を手に入れることが出来る。その後村の様子を見に行った際に、Huck は Jim っていう逃亡奴隷 (a runaway nigger) に殺されたのだ。そこで Jim には懸賞金が懸けられている旨を耳にする。

Huck は難破船に入り込んで、悪人同士の内輪揉めも目撃することになったこともある。更に川を下<sup>くだ</sup>って行って、William Shakespeare の悲劇、Romeo and Juliet、モンタギュ家 (the Montagues) の Romeo とキャピュレート家 (the Capulets) の Juliet の二人の悲恋を連想させる、シェパードソン家 (the Shepherdson) の Harney とグレンジャフォード家 (the Grangerfords) の Miss Sophia の二人と知り合う。この二人は恋仲で、自分達の恋路が妨げられない様に、Miss Sophia は Huck に力を貸してくれることを頼む。両家は三十年来不仲であって、互いに相手方を不倶戴天の敵として、抗争を続けているのである。

次いで、年寄りと青年を筏に乗せてやることになる。年寄りは前フランス皇太子と、青年は公爵だと身分を明かして、尊大に振る舞って、Huck と Jim を<sup>か</sup>しず<sup>ず</sup>傳かせる。

ところが、この二人は卑しい詐欺師でベテン師で、然かも鉄面皮な男達であったのだ。

二人して Jim をたったの 40 ドルで奴隷として、川下へ売り飛ばして、その金は年寄りが自分のものにして仕舞う。これを知った Huck は Jim 救出に向かう。一方、街の人達をさんざん欺いて来た二人は、街の人達に手酷い報復を受



けることになった。

Jim が買い取られて、監禁されている農場で、Huck は親友の Tom Sawyer と再会するが、Tom は Huck が死んで仕舞ったと信じ切っていただけに、思いも掛けなかった再会に二人は大悦びする。Tom はこの家の子供と従兄弟同士なのであった。そこで Tom は Huck に大掛かりな救出の方法を打ち明けて、実行して行く。

実は Miss Watson は二月前<sup>ふた</sup>に他界しているが、Jim を川下に売ろうとしたことを大変後悔して恥ずかしく思って、遺言で Jim を自由の身にすると書き残しているのだ (old Miss Watson died two months ago, and she was ashamed she ever was going to sell him down the river, *and said so*; and *she set him free in her will* 「Watson 嬢は遺言書の中にジムを自由とな (す由を記) した」)。

それを伝えるために Tom はやって来たのだったが、敢えてそれを言わないで、Huck と大変な騒動を引き起こしていたのだった。

Tom は Huck と Jim の二人に自分も加わって、三人で、筏の旅を続けたいと願っているが、大怪我を負って仕舞う。

黒人奴隷 Jim が心を込めて、大怪我をした Tom の世話をする (I never see a nigger that was a better nuss or faithfuler (= a lbetter or more faithfull nurse)), 優しい心根の人であることは、周りの人々に感動を与えて、自由の身になれた Jim は、Huck は元より、大勢から祝福されることになる。

そして Jim は Huck に、川下りの始めの頃に自分が見付けた射殺死体の正体は、実は Huck の父親だったと教えてくれる。

Tom の養い親である Polly 伯母の妹に当たる、この家の Sally 伯母が Huck を養子にして、ちゃんと躾けてくれる積もりでいるが、それは Huck には我慢出来ない。躾の厳しさは、一度経験しているからだ (aunt Sally she's going to adopt me and sivilize (= civilize; educate) me, and I can't stand it. I been there before. (= I was there once. Widow Deuglas に引き取られて窮命を見た事を云ったもの)。

さて Huck の冒険談の冒頭で、a poor lost lamb が得られた。Huck の年齢を踏まえて、sheep は lamb に替えられていると推定されるのであって、各々の邦訳は次の通りである。

中村為治訳<sup>17)</sup>「ハックルベリー・フィンの冒険」においては、「可哀さうな迷へる小羊」、吉田甲子太郎訳<sup>18)</sup>では、「かわいそうな迷える小羊」、西村孝次訳<sup>19)</sup>では、「さまよえる小ひつじ」、西田 実訳<sup>20)</sup>では、「迷える小羊」、土屋京子訳<sup>21)</sup>では、「哀れな迷える子羊」。

さて Huck の養い親となった Deuglas 未亡人は、Huck に向上心や向学心の欠けから見られないと見て取って、彼を心底憐れんで a poor lost lamb と呼んだのであった。

今回報告した都合 3 例の lost (or stray) sheep は、揃って a person who has got out of his natural environment<sup>22)</sup>の意味合いを担っている「人」である。

次いで 1611 年刊行の欽定訳聖書 (The Authorised (King James) Version = KJV)、1901 年刊行のアメリカ標準訳聖書 (American Standard Version = ASV) そして 1952 年刊行の改訂標準訳聖書 (The Revised Standard Version = RSV) の三種の英訳聖書<sup>23)</sup>の Isa. 53, 6, Matt.18, 12 そして Luke 15, 6 の三箇所を引用して、stray sheep と lost sheep とが共に用いられていることを明らかにしてみたい。

Isa. 53, 6

All we like sheep have gone astray ; we have turned every one to his own way ; (KJV)

All we like sheep have gone astray ; we have turned every one to his own way ; (ASV)

All we like sheep have gone astray ;

we have turned everyone to his own way ; (RSV)

Matt. 18, 12

How think ye? if a man have an hundred sheep, and one of them be gone astray, doth he not leave the ninety and nine, and goeth into the mountains, and seeketh that which is gone astray? (KJV)

How think ye? if any man have a hudred sheep, and one of them be gone astray, doth he not leave the ninety and nine, and go into the mountains, and seek that which is goeth astray? (ASV)

How do you think? If a man has a hundred sheep, and one of them has gone astray, does he not leave the ninety-nine on the hills and go in search of the one that went astray? (RSV)

イザヤ書 53 章 6 節及びマタイ伝 18 章 12 節の astray は、out of the way<sup>24)</sup>の意

味を担っているのであるから、astray は the stray sheep の成立に深く係わっていると推定されるのである。

そして the lost sheep の成立に密接に関連している lost は、ルカ伝 15 章 6 節で求められるのである。

Luke 15, 6

for I have found my sheep which was lost. (KJV)

for I have found my sheep which was lost. (ASV)

for I have found my sheep which was lost. (RSV)

### 3 夏目漱石の三四郎<sup>25)</sup>

夏目漱石（慶應 3 年 - 大正 5 年, 1867 - 1916 年）の三四郎は東京と大阪の朝日新聞に明治 41 年（1908）に連載、単刊本として翌年に刊行された。

迷える子<sup>ストレイ シープ</sup>という言葉は、漱石の「三四郎」の美禰子の発言から、初めて知ることになる場合が多いと思われる。

小川三四郎は東京で暮らすことになって、自分には三つの世界が出来たことを実感する。

第一の世界は国元にある。第二の世界には「苔の生えた煉瓦造り」の大学と図書館がある。広田先生や野々宮さんはこの内にいる。

第三の世界は、里見美禰子<sup>みねこ</sup>や野々宮よし子の美しい女性<sup>によしろう</sup>が「凡ての上の冠<sup>かんむり</sup>」である青春の世界である。

三四郎が広田先生、野々宮さんそして美禰子とよし子と連れ立って菊人形を見に行くが、美禰子の気分が悪くなったので外に出て、美禰子と二人きりになって仕舞うことになる。その時知らぬ人が突然二人に近付いて来て、通りすがりに二人を睨み付ける。

「迷子の英訳を知っていらして<sup>26)</sup>」と尋ねられて、三四郎は当惑して、咄嗟の返答に詰まって仕舞う。「迷える子<sup>ストレイ シープ</sup>——解って？」と言われるが、「解る解らないはこの言葉の意味よりも、むしろこの言葉を使った女の意味である」そしてその後にもものめりそうになった彼女を支えてやった時に、いま一度「迷える子<sup>ストレイ シープ</sup>」と呟く。

それから stray sheep は、三四郎の脳裏から離れなくなって仕舞い、意味を模索し続けた。暫くして「迷える子」から、デヴィルと仮名が振ってある獯猛な男と寐ている二匹の羊を、なかなかの手際で描いている、先日のことを題材にした絵端書が届く。三四郎は二匹の迷える子の内の一匹を「暗に自分に見立ててくれたのを甚だ嬉しく思った。迷える子のなかには、自分ももとより這入っていたのである。それが美禰子の思わくであったと見える美禰子の使った stray sheep の意味がこれで漸く判然した」と思った。

三四郎と美禰子の両名はそれぞれ互いに惹かれ合って、出会う機会も増えて行くが、彼は彼女に「惚れられているんだか、馬鹿にされているんだか」判断しかねて、翻弄されている思いである。

これこそは美禰子の「アンコンシアス・ヒボクリット無意識の偽善者<sup>27)</sup>」的な性格の然らしめるところであることは、言うまでもないと思われる。

やがて三四郎は彼女が急に嫁いで行くことを知るに至る。そして彼女は三四郎に聞き取れない位な声で、「われは我がとが愆を知る。我が罪は常に我が前にあり<sup>28)</sup>」と告げて行くのである。

この言葉には、三四郎と別れて、別の男の下に嫁いで行く美禰子であったが、三四郎に対する後ろめたさを自覚して、それを拭い去れずに、許しを請うことを願っている心情が込められていると察せられるのである。

この小説の結末に至って、三四郎が友人の与次郎から、美禰子の肖像画「森の女」に就いて感想を求められる。

三四郎はかつて美禰子と、デヴィルを連想させる男に出会った折に、彼女が自分達二人をデヴィルと抗うには弱すぎて、神の救いに縋るしかない羊に譬えた頃を想起した。それ以来彼女と訣別までの時期の体験こそが、画題とするに相応しいと見做したのである。併し乍らこれは自分と謎めいた<sup>29)</sup>彼女しか経験していない世界であって、他の者が踏み込める領域ではないのであるから、ストレイシーブ ストレイシーブ迷羊 迷羊<sup>30)</sup>と呟くのみであったのである。

## X 引用句としての「いなくなった〔放蕩〕息子」

「いなくなった〔放蕩〕息子」の用例は、英語の分野では、Daniel Defoe (1660 – 1731) の *The life and strange surprizing adventures of Robinson Crusoe* (1719) から 1 例と、Charles Dickens (1812 – 70) の *The personal History David Copperfield* (1849 – 50) から 1 例を収集出来たので、それについて報告することにしたい。

### 1 Daniel Defoe の *The life and strange surprizing advetures of Robinson Crusoe*<sup>31)</sup>

Crusoe は是が非でも外国へ行きたい (I would be satisfied with nothing but going to Sea = abroad) という衝動に駆られて、父や母の諫めにも耳を貸さないで家を出て、船に乗り込む。

ところが出航早々に激しい嵐に遭遇して恐怖に戦慄き、親不孝の酬いを受けたことを痛感して、心から悔い改めて父の元に帰ろうと決意するに至る<sup>くんだり</sup>件で、決意の程を表わす譬えとして、放蕩息子<sup>32)</sup>が引用されているのである。

「聖書の放蕩息子のように、ほんとうに悔い改めて、父のもとに帰ろう、とこころをきめたのである<sup>33)</sup>」

and I resolv'd that I would, like a true repentig Prodigal, go home to my Father.

この部分は A. Tuthen<sup>34)</sup> は次の様にドイツ語に訳出しているのであって、like a Prodigal には *wie der verlorene Sohn* を対応しているのである。

Kurz ich beschloß, daß ich es machen wollte wie der verlorene Sohn und reuig zurückkehren zu meinem Vater.

にも拘らず嵐が静まると、折角の誓いもさっぱりと忘れて、船に乗り続けるのである。

斯くして、八年後に難破して無人島に漂着して、長い時間を過ごすことになる。そこで才知を働かせて、逞しく、家を作り、畠を耕やすに至る事業を仕遂

げて、生活環境の改善と向上に努めて行ったのである。

そして漸く父の忠告を軽んじて、神と父への義務を蔑ろにして仕舞ったことを (the Comtempt of Advice, and the Breach of my Duty to God and my Father =...meine Pflichtlosigkeit Gott und die Eltern<sup>35)</sup>、心底から悔悟するに至るのである。父の忠告とは、上流でも下流でもない中間の身分が一番いい身分であって (and wish'd they had been placed in the Middle of the two Extremes, between the Mean and the Great : that the wise Man gave his Testimony to this as the just Standard of true Felicity, when he prayed to have neither Poverty or Riches), この中間の地位には、あらゆる種類の美点や安楽が備わっている。平和と充足に傳かれている (*that the middle Station of Life was calculated for all kind of Vertues and all kinds of Enjoyments ; that Peace and Plenty were the Hand-maids of an middle Fortune ;*) のだということを、若気の過ちを犯さない様、また天から与えられた身分や性質に逆らって不幸の中に身を投じることのない様に、心からの愛情を込めて、諭してくれたのであった。

Crusoe は聖書を精神生活の拠り所として、救いを求めて精読して、精神の安寧を得て敬虔な日々を送るに至る。

後に、<sup>のち</sup>Friday を救出して保護して、キリストの教えについても導いてやるが、その際にも「もし神が悪魔のように強くて、力を持っているのなら、悪魔を成敗してしまわないのか？」と問われて、答えに詰まる。ややあつて答えるが、その答えには、「いなくなった羊 (the lost sheep of the Hause Israll)」の譬えも引かれているのである。

Crusoe は Friday との対話を通じて、キリスト教への理解を一段と深めて、神への帰依が揺るぎないものになって行くのであるから、この部分の叙述は、極めて格調高く、注目に値すると思われるのである。そしてその後、彼の友人になった Friday を伴って、35 年ぶりに帰郷するが、両親は既に他界していて、面会は叶わぬことであつたのである。

夏目漱石は「文学評論」において、ロビンソン・クルーソーは、「ただ労働小説である。」<sup>36)</sup>と断じている。この冷やかな見解に至るまでの論証については、肯繁に当る指摘に教えられることが多い。然るに主人公の信仰の問題については、全く省みていないのである。

この件について、増田義郎「解説 大西洋世界のロビンソン・クルーソー<sup>37)</sup>」において、近年の内外の研究成果を踏えて、「ミルトンやバニャンにつながる宗教文学として捉える<sup>38)</sup>」解釈が示されているのは、正鵠を射たものと思われるのである。

## 2 Charles Dickens の The personal History David Copperfield<sup>39)</sup>

The personal History of David Copperfield の主人公である David Copperfield は、母の再婚相手に疎んじられて、寄宿学校に追い遣られる。そこでも校長に虐待されるが、上級生で利発な Steerforth が庇ってくれる。Steerforth は狡賢いところがあるにも拘わらず、David は彼に甚く恩義を感じて、直向きな尊敬の念を抱き続けているのである。

とは言え後日二人が再会した際に、David は、後々彼の妻になった Agens に、Steerforth は悪い守り神であるから避ける様にと (against your bad Angel) と忠告されることもあったのである。

さて Steerforth は裕福な家に生まれ育って、母親に溺愛されて来たので、彼の願いで叶えられないものはないくらいであったのである。そして Steerforth も自ら進んで、競争手を凌ぐ様に生きる道を歩もうと決めているのである。併し乍ら Steerforth は自分の育てられ方に必ずしも満足していないので、時には、まともな父親 (a judicious father) に確りと教育してもらいたかったと本心を明かしているのである。

ところで母親は自分達親子は、生れてから一心同体のようなものである (no separated existence since his birth) と信じ込んでいるのであるから、Steerforth は母親の意に添って振る舞う様に努めているのである。とは言え Steerforth にはそれが億劫であっても、応えざるを得ないのであるから、その様に勤しむ己れを歯痒がって、her prodigal son と自嘲気味の想いも洩らしているのである。

I am for Highgate to-night. I have not seen my mother this long time, and it lies upon my conscience, for it's something to be loved, as she loves her prodigal son. – Bah ! Nonsense !

この独白は中野好夫訳「デイヴィド・コパフィールド<sup>40)</sup>」においては、「今夜は、ハイゲトへ行かなきゃならん。だいぶ長い間、おふくろを訪ねてないんでね、いささか、気になってるんだよ。だって僕みたいな『放蕩息子』を、これだけ可愛がってくれるというのは、やっぱり、ちょっとしたもんだからね——チェッ！ つまらねえ！ こんな話はよそうよ——」と訳出されていて、her prodigal son には放蕩息子が対応されているのである。

her prodigal son には、中野訳に先立つ市川又彦訳では「道樂息子<sup>41)</sup>」、中野訳に続く 2 点の訳業のうちで、石塚裕子訳では「放蕩息子<sup>42)</sup>」、田辺洋子訳でも「放蕩息子殿<sup>43)</sup>」が当てられているのである。

さて Steerforth は、David の幼馴染で美しいが、誠実な Ham との結婚に気乗り薄な Emily を誑かして、外国へ駆け落ちするに至る。Steerforth の母親は激怒するが、息子の不行状を咎めるよりも、親子の間を引き裂いて仕舞ったのは、賤しい女の仕業に因るものと決め込んで、両人の結婚を認めるどころではない。

ところで Steerforth と Emily とは元々育った生活環境が異なった上に、志向するところも隔たっていたので、実生活の面でも噛み合わなくなって、その挙げ句 Steerforth は Emily を捨てて、姿を晦<sup>くらま</sup>す。Emily は苦労を重ねて生家に戻ることが叶う。

やがて近くの海辺で Steerforth が乗った帆船が難破し、救助に加わった Ham と子ども溺死して仕舞う。David は Steerforth の訃報を伝えに母親を訪れ、そこで彼女が遠縁の娘から、Steerforth を駄目にしたのは、あなただと面罵されているのを目の辺りにするのであった。

斯様にして her prodigal son は救われることなく、その上周りの人々まで不幸に捲き込んで、破滅するに至ったのである。

さて her prodigal son のうちの prodigal son に関して、市河三喜著「聖書の英語<sup>44)</sup>」においては、prodigal son (or child) = one who spends his time in pleasure and extravagance, but afterwards repents and is forgiven. (Luke XV. 11–32) と説いて、prodigal son から発想される表象について指摘しているのである。更に市河三喜・西川正身・清水 護編「英語引用句辞典<sup>45)</sup>」においても、one who has



caused grief to his parents by abandoning his home に対応すると説いて、その例証のうちに、David Copperfield 28 章の her prodigal son を挙げているのである。そして David Copperfield (II)<sup>46)</sup> に添えられている山本忠雄註釋においては、POD に拠って repentant sinner, returned wanderer, &C を意味していることが明らかにされているのである。

Robinson Crusoe の a true repentig Prodigal は、憔悴しきって、己れの所業を恥じて、ひたすら父の庇護を願ってやまない姿を適確に表している。

次に her prodigal son は prodigal son に関連していると共に、独自の意味合いを帯びているのである。

先ず Steerforth は母親の過保護振りに辟易しているものの、母の手中から脱する訳には行かないもどかしさが込められていることは、既に指摘したところである。

更にそれに加えて、自己中心的に生きているにも拘わらず、その様な生き方に後ろめたい、言わば内心忸怩たる心情も込められていると推測されるのである。

今回の報告は、英語の分野の用例の検討を取り上げている。ドイツ語の分野についての報告は、次回行う予定である。

(2018・11・26)

## 註

- 1) 角谷善朗「ルカによる福音書における三つの譬えについて — Luther 訳聖書と現代ドイツ語訳聖書に基いて — (1)」V いなくなった羊と無くした銀貨の譬え 教養論叢 第 137 号 2016 年 2 月。
- 2) 調査のテキストとして、Wuthering Heights by Emily Brontë with introduction and note by Minoru Toyoda I (cp. I~XVI) 1935, II (cp. XVII~XXX IV 1935. (Kenkyusha English Classics) を使用している。
- 3) 邦文は河島弘美訳「嵐が丘」上 (2017) からの引用である。
- 4) 「中に入ると、…椅子を揺すっていた」までの邦文は、河島弘美訳「嵐が丘」下 (2017) からの引用である。
- 5) 三宅幾三郎訳「嵐ヶ丘」上 1950, 下 1950。
- 6) 阿部知二訳「嵐が丘」上 1965, 下 1965。本訳業以降の訳書の題名は、全て「嵐

が丘」である。

- 7) 大和資雄訳 1972。筑摩世界文学大系 33。
- 8) 永川玲二訳 1990。集英社ギャラリー [世界の文学] 3 イギリス II
- 9) 河野一郎訳 1993。新装世界の文学セレクション 36 14 E. ブロンテ。
- 10) 小野寺健訳 上 2010, 下 2010。
- 11) 河島弘美訳「嵐が丘」上 2017, 下 2017。
- 12) 本文 P. 121 の the stray sheep に付けられた註解。
- 13) 本文 P. 219. の my stray lamb に付けられた註解。
- 14) 調査のテキストとしたのは, The Adventures of Huckleberry Finn by Mark Twain with introduction and note by Eizō Ōhashi 1935. (Kenkyusha English Classics) である。
- 15) 本文に添えられた括弧内の註解は, テキストに記載されているものの再録である。
- 16) 邦文は千葉茂樹訳「ハックルベリ・フィンの冒険」上 (2018) からの引用である。因みに下の刊行も 2018 年である。
- 17) 中村為治訳 (上) 1950。
- 18) 吉田甲子太郎訳 1966。世界少年少女文学全集 35。
- 19) 西村孝次訳 1968。世界の名著・12。
- 20) 西田 実訳 (上) 1997。
- 21) 土屋京子訳 (上) 2014。
- 22) Dictionary of english Quotation with examples of their use by authors Edited by S. Ichikawa, M. Nishikawa and M. Shimizu Reprinted with corrections 1968. Matthew 10, 6 の項。
- 23) 三種の英訳聖書の各々の成立事情, 及び文体上の特徴については, 註 1) の報告で取り上げている。

今回は三種の英訳聖書のタイトル・ページ (表題紙) の部を, 逐一紹介することにした。各々の成立の状況の理解に資するところ多いと思われるからである。

(1) 欽定訳聖書 (The Authorised (King James) Version = KJV)

The Holy Bible containing the Old and New Testaments

Translated out of the Original Tongues and with the Former Translations diligently compared.

Authorised (King James) Version

Self-pronouncing Reference Edition

(2) アメリカ標準訳聖書 (American Standard Version = ASV)

The Holy Bible containing the Old and New Testaments translated out of the Original Tongues

being the Version set forth A. D. 1611

compared with the most ancient Authorities and revised A. D. 1881 – 1885.

Newly Edited by American Revision Committee A. D. 1901 Standard Edition

(3) 改訂標準訳聖書 (The Revised Standard Version = RSV)

The Holy Bible containing the Old and New Testaments Revised Standard Version

Translated from the original Tongues

Being the Version set forth A. D. 1611

Revised A. D. 1881 – 1885 and A. D. 1901

Compared with the ancient Authorities

and revised A. D. 1952

24) An etymological dictionary of the English language by the Rev. Water W. Skeat, Litt D., D. C. L., LL. D., Ph. D., F. B. A. New Edition Revised and Enlarged. 1924.

25) 夏目漱石：三四郎 解説 菅野昭正 2017。

26) Christoph Langemann に依るドイツ語訳 Natsume Sōseki Sanshirō 1991. においては、美禰子のこの問いの部分は、次の通りに訳出されている。

“*Stray sheep* — verlorenes Schaf — Verstehen Sie?”

*Stray sheep* にはドイツの読者の理解の助けとなる様に、ドイツ語では一般的である *verlorenes Schaf* を添えているのである。

27) 小宮豊隆：夏目漱石（下） 2007。

小宮豊隆：三四郎解説 昭和 25。

吉田精一：もっとも漱石的な作品 夏目漱石全集 5 解説 2001。

28) 旧約聖書詩篇 51 篇からの引用であって、欽定訳聖書における英訳は、次の通りである。

3. For I acknowledge my transgressions : and my sin ist ever before me, (KJV Ps 51, 3.)

「愆」とは、イエラエルのダビデ王が、家臣の妻バテセバを我が物とするために、夫のウリヤを戦死させた非道な仕打ちを指している。

因みにこの詩句は、英訳聖書では詩篇 51 篇 3 節であるが、Luther 訳聖書では 5 節に収められているのである。

Luther 訳現代語改訂版の同一箇所は、次の通りである。

4. Wasche mich rein von meiner Missetat und reinige mich von meiner Sünde

5. denn ich erkenne meine Missetat, und meine Sünde ist immer vor mir. (1964. Ps 51, 4 – 5.)

出典は、Die Bibel mit Apokryen. Nach der Übersetzung Martin Luthers 1985. である。(旧約正典は 1964 年、旧約外典は 1970 年、新約正典は 1984 年改訂の訳文を収めている)

29) 三四郎をドイツ語訳した Christoph Langemann が本文に添えた Nachwort からの

引用である。

Wir sehen Mineko nur durch Sanshirōs Augen, und sie bleibt uns deshalb bis zum Schluß rätselhaft.

30) 三好行雄：三四郎

玉井敬之：三四郎の感受性 ——「三四郎」論——

三好行雄 平岡敏夫 平川祐弘 江藤 淳編 講座夏目漱石 第三卷〈漱石の作品（下）〉昭和 56 年。に収録。

三好行雄：迷羊の群れ 「三四郎」夏目漱石 三好行雄著作集 第五卷 作品論の試み 1993 年。

31) 調査のテキストのタイトル・ページ（表題紙）は、次の様に記されている。

Daniel Defoe : The Life and Strange Surprizing Adventures of Robinson Crusoe, of York, Mariner :

Who lived Eight and Twenty Years, all  
alone in an un-inhabited Island on the  
Coast of America, near the  
Mouth of Greart River of Oroonoque :  
Having been Cast on Shore by Shipwerck,  
Wherein all the Men perished but himself.  
Wlth  
An Account how he was at last as strangely  
deliver'd by PYRATES.

Written by Himself.

Edited with an Introduction by J. Donald Crowley 1972.

本書の内容を巧みに要約している筆法であると、評価される。次に増田義郎 訳・解説「ロビンソン・クルーソー」2010. から、この箇所の訳文を引用したい。

難破してひとり岸に打ち上げられ、アメリカ海岸、  
オルーノコの大川の河口近くの人無島に  
28 年間孤独の生活を送ったヨークの船員

ロビンソン・クルソーの生涯と  
驚嘆すべきめずらしい冒険

および、そのすえに、彼が奇しくも  
海賊の手で救出されたいきさつに関する本人の手記

- 32) 野上豊一郎訳(全四冊)(一) 1946, と平井正穂訳(全二冊)(上) 1967, 及び増田義郎訳 2010 で, 共通して対応している訳語である。
- 33) 註 31) に紹介している増田義郎訳・解説「ロビンソン・クルーソー」からの引用である。
- 34) Robinson Crusoe Aus dem Englischen übersetzt von A. Tuthen 18??.
- 35) 註 34) の A. Tuthen のドイツ語訳からの引用である。
- 36) 夏目漱石: 文学評論(下) 1996 年「第六編 ダニエル・デフォーと小説の組立」  
明治 38 年 6 月から同 40 年 3 月までの東大英文科の講義「十八世紀英文学」を骨子として, 明治 42 年に出版された。
- 37) 註 31) に前述した増田義郎訳・解説「ロビンソン・クルーソー」に収録されている「解説 大西洋世界のロビンソン・クルーソー」の「二 寓話としての『ロビンソン・クルーソー』」。
- 38) 註 37) 参照。
- 39) The personal History of David Copperfield by Charles Dickens with introduction and notes by Tadao Yamamoto I 1954, II 1954, III 1956. (Kenkyusha British and American Classics CVIII CVIX CVX).
- 40) 中野好夫訳(全 2 冊) 第一部 1963。
- 41) 市川又彦訳(全 6 冊)(三) 1951。
- 42) 石塚裕子訳(全 5 冊)(三) 2002。
- 43) 田辺洋子訳(全 2 冊)(上) 2006。
- 44) 市河三喜: 聖書の英語 1937。III 慣用句集。
- 45) 註 22) 参照。
- 46) 註 39) 参照。